大地

第 34 号
2010.5.05.発行
浄 國 寺
上越市寺町3-14-10
☎025-523-5724

俳句

山崎 睦

春めくやキャベツ躍(おど)らせフライパン
春眠も病となれば憂(う)きこころ
寒卵鮮やかな色盛り上がり
彼岸会や詣(まい)りなき墓供華(くげ)を上げ
車椅子花に見惚れし九十四
雪消えの墓地に遊びし小鳥かな
囲い縄庭に散り居し春の夕
白き空万朶(ぼんだ)の桜に呑まれおり
老人の施設にも飾られし雛の段

桜のなかりせば

山崎 慎子

今年の桜は低温の日が続いたお陰で、長い間私たちを楽しませてくれた。

曇り空や雨の桜はどうもいただけない。やはり晴れ渡った日、ことに雪を残した妙高を背景に眺める桜を見るとき、胸の高鳴りを覚える程だ。

いつの頃からだろう。花の一種類でしかない桜が、心を浮き立たせ、ささやかな詩心をかきたててくれるものになった。

世の中にたえて桜のなかりせば
春の心はのどけからまし
《古今集 在原業平》

昔の人は何と美事に三十一文字で言い尽くしたことだろう。

城跡の高田公園をとりまく桜は、その数四千本といわれ、日本三大夜桜のひとつに数えられているが、その全容を楽しむには、昼の桜も併せて観るのがベストであろう。

忠霊塔前の枝垂れ桜、そこから北に向かって伸びる桜ロードの花の庇の華やぎ、道路を渡れば、お濠の水面すれすれに枝を広げる桜たち。三重櫓も年々風格を増し、ムクの階段を昇って櫓の上から見はるかせば、松の緑、空の青、桜のピンク、キラキラ光る水の面、とくらくらと酔いそうな気分である。

三重櫓を降りて極楽橋を渡り、おみやげやさんを通り抜けて図書館の南側へ進めば、高田高校の北側から上越大通りに伸びる外濠を囲む桜並木が、また幻想的である。

そして、博物館を対岸にして、お濠の西側から眺めるのも一興。あるいは北城高校前のお濠端から雪をいただいた妙高を背景に観るのもなかなかである。

以上は高田公園周辺の楽しみ方の、ほんの一端である。高田付近はこの時期、少し歩けば、いろいろの桜の佇いが楽しめる所である。

たとえば、寺町三丁目の日朝寺さんの桜。十数年前、犬の散歩をするようになって、樹齢二百数十年といわれる樹に巡り合った時の感激は今でも鮮やかに蘇る。

以来春になれば開花を待ち侘びて、一日に何度となく、その道を通ることを心がけ、その花びらが散ってしまうまで、見飽きる事なく愛でるのが習いになってしまった。

東側の道路から眺める位置に在るので、晴れた日の朝、青空を背景に仰ぎ見るのが一番素敵と思っているのだが、日没前のシルエットも、何やら妖し気で趣がある。

心浮き立たせる桜によせて駄句を三句

月の夜は立ち現るか桜の精
花筏親指姫の潜むらし
極楽橋渡りて娑婆の桜万朶

父の思い出

山崎　豊

「じいちゃんはお酒が飲めなくなったら、死んでしまう」
お酒が好きだった父が、病気を患う前によく言っていた言葉です。そのたびに母と私たち二人の兄弟も
「お酒を飲みすぎる方が、体に悪いよ。飲みすぎるほうが、早く死んでしまうよ」
と父に言っていたものです。それでも父は健康のために、タバコはやめましたが、お酒は最期までおいしそうに飲んでいたのが思い出されます。それは放射線治療や抗がん剤治療といった、苦しい治療の間でも、お酒を飲むときの父は、病気のことを忘れさせてくれる笑顔で、飲んでいました。病院には悪いことをしたと思いますが、父が亡くなる少し前に家から病室にお酒を持ってきて、口を湿らす程度でしたが、父に飲んでもらったことも思い出します。

父のお酒のことで一番に思い出すのは、私が小学校四年の新年の初売りに、父と二人で私のスキーを買いに行った時のことです。当時私たちの住んでいた街には、駅前にデパートが二軒並んでありました。私は自分のスキーを買ってもらえるのがうれしくて、急いでスポーツ品店に向かっていたのだと思います。そしてその二軒のデパートの前を過ぎて、ふと後ろを振り返ると、父が見当たらなくなっていました。あわてて父を捜すと、父は初売りの振る舞い酒をもらって、飲んでいました。それもこっちのデパートからあっちのデパートへと行ったり来たりして。恥ずかしいやら、あきれるやらでしたが、父は
「樽酒は木の香りがして、おいしいな」
と、まったく私の気持ちなど気にもしていなかったように、記憶しています。

でも父は本当によく働きました。石材業という肉体労働だったこともありますが、胸や腕の筋肉が発達していて、それこそボディービルダーのようでした。その筋肉は働いたからこそついたもので、子どもの頃はあこがれていました。力こぶをつくる父の両腕に、自分と友達あわせて四人がぶら下がったことを思い出します。

お寺に墓石を建てる時は、完成するまで仕事をするため、夜遅くまでかかることも多かったと思います。小さい頃、私は家で留守番をしていたのですが、あまり遅くなった時に、疲れて帰った両親にさみしさから、こんなに遅くなるまで働くなと文句を言ったそうです。私が大きくなってから父はよく
「疲れて帰ってきたうえに、豊に怒られた」
と、この話をしました。石材業といっても、家族だけでやっていて、工場があるわけでもなく、家の中で仕事をしていることが多かったので、両親の働いている姿をいつもそばで見て育ちました。そのせいか仕事が大変なことがよくわかっていたので、兄も私も仕事はよく手伝ったと思います。働いている両親の姿を見ることで、一生懸命働くこと、がんばることの尊さを学んだと思います。両親からあれをしろ、これをやれと言われた記憶がありませんが、両親の働く姿こそが、自分にとって一番の教えになっていると思います。私は今、田舎の病院で勤務医として働いていますが、医師の数が足りずに、仕事がきつくても、なんとかがんばってやっていけるのは、こんな父の姿があったからだと思います。今後もお酒を飲んだ時に、父を思い出し、がんばる力をもらいたいと思います。

※本年は、山崎石屋さんの七回忌、七月には法事を営まれる。
それを機に、秋田で医師をされている息子さんに、お父さんの思い出を書いて頂いた。本文中にあるように、お父さんは実直そのもの、お酒を本当に美味そうに呑まれた。ご家族四人が力を合わせ、墓造りをされていた姿を思い出す。（隆）

新酒を味わう

山崎隆昌

頸城野の地に春が来るのは遅い。特に本年は正月から降り続き、境内の積雪はたちまち一メートルを超え、一月の終わりには本堂、お庫裡ともに早めの雪下ろしをした。二月になっても雪降りの日が続く。

立春を十日余り過ぎた二月十四日、久しぶりの雪晴れ、当日は浄國寺同朋会二月例会が朝の八時三〇分から開かれ、雪みちの中二十名近い人が参加された。話も大いに盛り上がり楽しい会であった。十時過ぎに解散する。

この日母はデイサービス、朝から勇んでお出掛け。それではと、我らも出掛けることに。かねてからの懸案であった新酒の仕込みを見せていただくためである。

大杉屋の宮越夫妻にもご同行いただいた。目指す酒蔵は、牧村（区）の入り口に近い飯田にある『上越酒造』銘柄は『越後美人』。高田から東方に車で走ること三十分ほどで到着する。

酒蔵の建物に入った途端に、酒の香りが漂って来る。鼻も心もピクピクする。

蔵の中は活気にあふれていた。入り口近くに五右衛門をゆでたような大きな釜があり、中程には周囲が十メートル位でハシゴの掛かった円筒タンクが並ぶ。一つのタンクをのぞかせていただく。ハシゴを上り見るとブツブツ沸いていた。これがどぶろくかと思う。

タンクの手前に家庭浴槽の四倍ほどの真四角の木製の舟。舟には絞る前の酒が送り込まれるが、職人さんがホースから音を立てて流れ出るそれを、長形の布袋で受けて舟の中に並べている。絞られて舟の底から出てきた酒が舟口の酒。布袋には酒粕が残る。

蔵主の飯野氏は、穏やかな雰囲気の人。笑みの絶えない静かな風貌は学者風の感がある。

飯野氏「酒は、米のでんぷんを糖分に変え、糖分をアルコールに変えることで出来ます。この過程でさまざまな事が行われるます。それが酒造りです」とのこと。

さらに、一つ一つの作業工程について説明していただいた。見るもの聞くもの、どれも珍しく貴重な体験で、ナルホド、ナルホドとうなずくばかり。酒が生き物であることを実感した。

同行の宮越氏は、さすが事に良く精通しておられ、飯野氏の説明をさらに膨らませていただきありがたかった。

酒造りのことは全く知らないくせに、酒にはとんと目がない方で、舟口の酒、どぶろく、出来立ての新酒、我輩はただ飲むばかり。

飯野氏「舟口の酒は粗いでしょう」

わたし「そうですね。ふむふむ」

もっともらしくうなずくが、実際は普段飲む日本酒とは少し違うな程度しか判らない。ただ、気持ちの良い酔いに、至福、至福。

今は、このように昔ながらの手作業で酒造りをしている酒蔵はほとんど無いとのことである。

昼間から酒を飲んだこともあり、身も心も温められた一日であった。

「酒は文化である」と教えられた坂口謹一郎博士の本を読みたくなった次第。

どぶろく飲み初め

今から三十六年も前のこと、その年の十月父はガンに罹り入院手術。ために、初めて桑取地区の「お取越し」に出掛けた。

宿泊は、皆口"じんねもさ"の家、お勤めも終わり食事（お斎）となった。

すると、じんねもさの父ちゃん立ち上がり「だんなん、うまいもん飲ましやんでね」と言われ、何やら瓶を持って来られた。杓子で中をゆっくりとかんもし、茶碗にそれを汲み「まあ、飲んでみない」と、笑いながら差し出された。

僕は、不思議な匂いのする甘酒のような液体を一気に飲んだ。思わず「うめー」。

これが、我がどぶろく飲み初め、どぶろくを飲むと、このことを思い出す。（隆昌記）

犬はコタツでまるくなる

山崎隆昌

この冬は近年にない大雪だった。暖冬小雪を予報した気象予報士をあざ笑うかのように一月から二月にかけて雪の日が続いた。

雪が降れば「犬はよろこび庭かけまわり、猫はこたつでまるくなる」と歌われる。ところが我が家では「犬はコタツでまるくなる」と歌わなければならない。

同居するワン公二匹（パグ犬）は、とにかく寒がりで、日暮らしコタツから離れない。離れるのは食事、排泄、そして散歩の時のみ。

散歩は朝の五時半ころ家を出る。冬季はまだ暗い。寺町通りを上り、高田駅を経て本町通りを下り、北本町から家に戻る約二キロのコース。雁木通りの散歩道。

そもそも、犬という動物は、生来散歩が大好きで飼い主に尾をふり足も軽やかに出掛けるとされるが、我が家のワン公は横着犬で、ハーネスをぶら下げ迎えに行くと、大きな目を上目づかいにして「やだな～、散歩に行くの？」という顔をする。寒い冬の日は、この傾向が一層ひどくなる。

暗い道、重い足取りで、寒い中を歩く。それでもまだ若い華公はスムーズに歩くが、上の十歳になる蓮公は、いやいやながら、もたもたと歩く。

しばらく歩くと立ち止まる。リードを引く私を見上げ「帰ろうよ」という顔をするのだ。「蓮、行くぞ」とリードを引いて声をかける。すると、またとぼとぼ歩きだす。

現金なもので、散歩コースが半分を過ぎた頃になるとだんだん元気になる。さらに終わりに近付いてくると、足は益々軽やかになりスピードが増してくる。食いしん坊の二匹のことだ、おそらく餌が目の前にちらついているに違いない。

ようやく家につき、足を拭いて食事となる。餌を食べるスピードたるや見事なもの、あっと言う間とはこのことだ。あの散歩のもたつきは何なんだ。飼い主はあきれるばかり。

そして食事が終了した途端「犬はコタツでまるくなる」のである。

春の椿事

山崎慎子

四月半ばの朝まだき、朝のお参りと、戸を開けるために本堂に行った時のことです。何となく違った気配を感じました。

このえも言えぬ違和感は何だろう、と思いながら、漸く明るくなろうとしている本堂を見まわしました。お内陣を見て、目を疑いました。私はまだ目覚めていなくて夢の途中かといぶかった程です。台畳（内陣で読経するお坊さんが坐る所）に、何とメスの雉が鎮座していたのです。！　カラスより大きな雉は、密室にどうやって入ったのでしょう。

次第に明るさを増して行く本堂を見回して再び驚いてしまいました。腰高の窓の障子が破れ、ガラスが大破散乱しているではありませんか。よく見れば、あちこちに糞がまき散らしてあります。こちらの姿が見えているのかいないのか、さして慌てた風もありません。

向拝の戸を開けると、外の明りがパーッと入りこみました。その明りに促されるように迷い鳥は外に飛び立って行きました。

春の明け方のまたとない椿事でした。何かに追いかけられたのか、あるいは虫でも追いかけたものなのか、今もって謎です。

ガラスに激突してケ破り、その勢いで障子を突き抜けて本堂に入った、という次第。しかも、障子の桟はひとつも傷んでいません。

数日後、やはり同じような薄暗い時刻に、裏庭でケーンという声が響きました。居間の外のグミの木の下に一羽のオスの雉、何かついばんでいる様子です。

次第に明けて行く光の中で、美しい羽根の色が顕わになってきました。息を殺して見ながら、これはきっと先日の雉のご亭主の“雉の恩返し”だと、一人悦に入っております。